[ラルフ・W・ハリス]「聖霊」

X. 霊の賜物

コリント人への手紙 12 章

霊の賜物について学ぶには、私たちはただ第一コリント 12:1 における**「兄弟たちよ。霊の賜物については、知らずにいてもらいたくない」**とのパウロの勧告に従うほかはない。イエスの再臨の直前、地上における聖霊の働きがいちじるしいこの時代に、信者の中に、また信者を通して働く聖霊の働きについての十分な知識を得ることは、クリスチヤンにとって不可欠のことである。

賜物とは何を意味するのか

まず**「賜物」**という言葉を定義する必要がある。

普通、私たちが賜物について考える時、自分のものとして与えられ、思いのままに使える何か有利なものを考える。聖書の中にもこのような意味をもったギリシャ語が用いられている。しかし、コリント人への第一の手紙 12 章から 14 章に賜物と訳されているギリシャ語は、この意味ではない。ここに記されている賜物はだれかによって所有され、用いられるものではない。この語はカリスマタ”Charismata”で、福音書にも使徒行伝にも一回も用いられておらず、手紙の中だけに用いられている。この言葉は直訳的には**「神の愛と恵みの権限の授与」**という意味である。コリント人への第一の手紙 12:31 には、パウロは**「だが、あなたがたは、更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう」**と語っている。これに関しては第一コリント 12 章に述べられている。それらに加えて”Charismata”（賜物）が、ほかにも記されているのに注意することは役に立つ。ローマ人への手紙 12：6-8 は、ほかのものをあげている。

知恵の言葉とは何か

これらの霊的な問題を論ずるに当って、特別な定義を知っておくことは有益である。よく**「知恵の賜物」**という言葉を聞く。聖書は、神から与えられたこの賜物に対してそのような言い方をしてはいない。御言葉は**「ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられている」**と言っている。

ペンテコステの日の聖霊の注ぎより、はるか以前に、この賜物の前兆があった。エジプトにききんが迫った時、**ヨセフ**はパロの前に神から与えられた知恵の言葉を語った（創世記 41:38-40）。**ソロモン**はある子どもの真の母を定めるに当って、神からの知恵の言葉を語った（列王上 3:16-28）。**ダニエル**は、多くの場合、知恵の言葉が与えられた。

新約聖書において、神のこの賜物は完全な形において与えられている。イエスは弟子たちに**「あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授ける」**と約束した（ルカ 21:15）。その理由は、**「言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださるからである」**と彼は語った（ルカ 12:15）。
イエスはご自分の経験において、バプテスマのヨハネについての質問により反対者たちを困らせた時、この知恵の言葉を示したのであった（マタイ 21:25）。また、カイザルへ税金を納めることに関して、反抗者たちへ賢明な方法をとった（マタイ 22:21）。

それゆえ、**知恵の言葉は信者を通じて知らされた神の無限の知恵の一部である。**

知識の言葉とは何か

知識の言葉とは自然の過程によっては知ることの出来ない事実の啓示である。一方、知恵の言葉は神の完全な知識に基づいた一連の行為の啓示である。

知識の言葉と知恵の言葉の性質から、これらの賜物は奇跡、いやし、異言の賜物のように容易に見分けられるものではない。ドナルド・ジーは「これらのものは、そういうものであるから、私たちはこの学びについて、独善的にならないように注意しなければならない」と言っている。

この賜物は神の性質の一つである全知から出たものである。御言葉は超自然的な賦与によってのみ持つことの出来る知識を受けた人々の、多くの事例を記している。

旧約聖書の中にはこの賜物の前兆が見られる。**サムエル**はサウルがやって来るのを知り

（サムエル上 9:15-16）、また彼が「荷物の間」にかくれているのを知っていた（サムエル上 10：21-22）。**エリシャ**もまたスリヤの軍隊の所在に関して、超自然的な知識を持っていた（列王記下６：8-12）。

私たちが予想する通り、**神の御子**はこの世における伝道の中にこの賜物を現した。例えば、彼はいちじくの木の下にいたナタナエルを（ヨハネ 1:48）、サマリヤの女を（ヨハネ 4:18）、そしてラザロの死を知っていた（ヨハネ 11:14）。

聖霊のこの現われは初代教会の中に大いに見られた。聖霊は**ペテロ**に３人のものが彼に会いに来ることを告げた（使徒 10：19）。神はダマスコにいた弟子**アナニヤ**に対して、新しく回心したサウロが「真すぐ」という名の路地におり、自分のために祈りに来るアナニヤの幻を見たということを語った（使徒 10-12）。

多くの学者たちは、知識の言葉はとくに初代教会においては、教える働きに関係づけられていたと信じている。しかし、記憶しなければならないことは、これは分析と論理についての生来の能力をさしているのではない。そこには超自然的要素がなければならない。人間の知的能力は働くが、その知識は神から賦与されるものである。

霊を見わける力とは何か

多くのクリスチャンは**「霊を見わける力」**の本当の意味を知らない。彼らはそれを誤って、人の行為をさばくことに関して考えているようである。しかし、それは単なる普通の洞察力ではない。それは、あら捜しの霊ではない。これは**霊を見わけるべきもので、人間の生来の行為に関するものではない。**

それは、ほかのすべての賜物と同様に、この賜物の働きに、超自然の領域に属するものであることが強調されなければならない。その言葉は元来**「徹底的に判断する」**という意味を持っている。人間の生来の行為に関してならば、これはただ生来の能力を意味するだけである。しかし、霊を判断するには、私たちは神の助けを必要とする。

霊を見わける力は使徒行伝において、次の場合に現わされている。
（1）ペテロが、アナニヤは聖霊を欺いているということを知った時（使徒 5:3）。
（2）ペテロが魔術師シモンをけん責した時（使徒 8:23）。
（3）パウロが占いの霊につかれた女をけん責した時（使徒 16:16-18）。

御言葉は主の再臨に先立って、惑わしの霊の危険性が大きくなるであろうと語っている（マタイ 24:24）。いかなる場合にも、三つの霊のうちのただ一つだけが働いているので

ある。すなわち聖霊、人間の霊、そして悪霊のいずれかである。この霊を見わける賜物は私たちにどの霊が働いているかを知らせるのである。

語る賜物

コリント人への第一の手紙 12 章に述べられている賜物の３つは、語ることに関係している。これらの中で預言は第一に現われている。多分、その理由は知恵の言葉、知識の言葉のようなほかの賜物は、この賜物を通して働かなければならないからである。

預言は「聖霊のまったき油注ぎのもとに、その人自身の言葉で語ること」と定義づけられてきた。説教の中にも確かに預言的要素がなければならないが、これは普通の説教とはまったく違うものである。多くのペンテコステ派の説教者たちは、説教の途中で、突然、聖霊が普通ではない方法によって注がれ、そしてしばらくの間、その力に押し流され、以前に学んだことも考えたこともない真理を語った、ということを証しすることが出来る。未来に起こることを告げる場合もあるが、**新約聖書の預言は普通は、聖霊によって語り出すことである。**

賜物としての異言は、**聖霊のバプテスマの経験のしるしとして与えられる異言**と本質においては同じである。しかし、目的と働きにおいて違っている。メッセージとして会衆の中に与えられた時、**その目的は御言葉を確かなものとするためである。**

たといメッセージが、知られた外国語で語られ、（語る人にはわからないが）その言葉を使う人によって理解された場合でも、つねに、**異言は教会の徳を建てるために訳されなければならない。**

異言の訳は、一つの言語をほかの言語で語ることにおいて説明する、通訳者の働きに似ている。違いは、これが聖霊の趨自然的な働きによるものだということである。また、これは一句一句訳していくものではないことを強調しておく。その働きが聖霊から来るものであるとは言え、神は人間の霊を通して働くのである。異言を語ることと、それを訳すことがお互いに完全に行なわれる時、それは預言の賜物と同じ働きをするのである。